

H28年度北見赤十字病院(認知症疾患医療センター) 市民公開講座

開催報告

日時 平成28年11月13日(日) 13:30～15:00

会場 北見市芸術文化ホール 中ホール

今回、市民公開講座を開催致しました。

当日は220名の市民・関係者の皆様にご来場いただき盛大に終えることができました。
ご参加、ご協力ありがとうございました。以下、講座の内容を報告致します。

～ ＊ ～ ＊ ～ ＊ ～ ＊ ～ ＊ ～ ＊ ～ ＊ ～ ＊

講演 「認知症の人たちの小さくて大きなひと言」～誰もが安心して住める街づくり～

講師 認知症介護研究・研修東京センター 研究部長 永田久美子先生

座長 北見赤十字病院 吉田茂夫 病院長

認知症は特殊な病気ではなく、他人事でも無い。
認知症を隠す時代では無くなった。認知症の人は自分の
一歩先に行く人と捉えると良い。

本人・家族の話を聞くと、本人に的の当たった支援が
できる。

本人の希望が大切であり、当事者は後の人のために、
勇気を持って声を上げて欲しい。



認知症は長い時間を書けて少しずつ進む。

自分らしい暮らし → 発症 → 会話の支障が増える → 全身状態低下 → 終末

ストレスがかかると混乱しやすく、できる事もできなくなる。反面、馴染んでいること、好きな
事は保たれやすい。

知識にとどまらず、本人の体験を教えてもらわないと、本人の支援に繋がらない。今までの支援
は、周りが良いと思う事ばかりをやってきた。

「なった本人にしか本当の事はわからない。」

どんな体験をし、どんな支援が必要か？

↓

本当の事は本人にしかわからない。

↓

本人の声に耳を澄ましてみましょう。

認知症の方がつぶやいたひとこと

「ぼくは壊れていく。助けて。」

本人がどれだけ認知症と格闘しているかを周りが知った一言。
周り（家族や支援者）が本人が直面している事を知って、対応すると本人が安心する。
一人では悩ませない。一緒にやっていく。周りの支援する人たちも孤立せず繋がるのが大切。

「なんで俺のことを勝手に決めるんだ！」

「俺、あんたのために病院に行く」

「俺、何か悪いことしたんかな」

「母親として、何もできなくなってしまうのが悲しい」

本人の役割を周囲も大事にすることが重要。自信を喪失していく悲しみ。

「4時だ。家さ帰らなんね」

解決しようとせず、背景や次の言葉を理解しようとする。

ある地域では認知症の方が地域の役割を担って生き活きと暮らしている。
地域で暮らす認知症の方は支援を受けるだけの存在ではなく、地域の役割の担い手になり得る存在でもある。そのために、地域住民ひとり一人が協力できることがあるのではないのでしょうか。

～ ＊ ～ ＊ ～ ＊ ～

以上、講演内容を抜粋し一部掲載致しました。
参加者の声もご紹介します。

(感想)

- ・わかりやすい先生の話し方でした。ためになりました。
- ・素晴らしい講師でした。
- ・認知症の方の言葉から、その想いを考える大切さ、大きな想いを学ばせていただきました。
- ・認知症の方が出すサインが、事例として聞いたことがとても勉強になりました。
- ・小さくて大きな一言はとても良かったです。あっという間に時間が過ぎました。
- ・支え合いが大切だと実感。人と人の「つながり」を増す取り組みの必要性を感じました。

(要望)

- ・今後も専門講師を招き、市民全体で考える講演を続けて欲しい。
- ・自分らしく社会や地域に関わりながら、集い・学び・楽しむ場所づくりがしたい。
- ・北見市の現状についても紹介があると参考になる。
- ・小さな自助グループの先駆けになるような研修や講座があれば良いと思う。

今後も、皆様の声を活動に反映しつつ、講演会・研修会等で情報発信していきたいと思います。
皆様のご参加をお待ち申し上げます。

(事務局 伊藤 記)

